

笑顔でくらすために ～仕事と子育て・介護の調和を考える～報告

日時：2012年6月27日（水）13:30～16:00

会場：東京ウィメンズプラザホール

参加者：一般参加62名、東京都職員24名、男女平等参画推進連絡会、東京都生協連20名 計106名

シンポジウムに先立ち、生協のWLBムービーを流しました。それぞれの生協から集まった写真やコメントは、働き方や暮らし方などを、東日本大震災復興ソング『君が笑ってる、みんな笑ってる！！』に載せて流しました。笑顔になれるムービーからシンポジウムが始まりました。

開会挨拶 東京都生協連男女平等参画推進連絡会座長 東都生協 庭野理事長

少子高齢社会の中で、性別、年齢に関わらず働いてもらえるような職場のあり方、また一人ひとりの能力が短時間のうちに活かせるような仕組みづくり、充実した仕事があれば充実した生活を送れる、充実した生活があればよりよい仕事ができるそのような観点からワークライフバランスを考えてほしいと思います。仕事と子育て、介護のことを考えるきっかけとしていただきたいと思います。



基調講演 笑っているパパ、す・て・き！

安藤哲也氏（NPO法人ファザーリング・ジャパン代表理事）



3人のパパであり、大手保険会社でフルタイムで働くママと5人暮らしで、近所に親は居ない典型的な都会の共働き核家族です。全く家事が出来なかったが育児は期間限定、喜びを味わえるのに母親だけに任せておくのはもったいないと、OS（基本ソフト）を入れ替えて「笑っているパパになろう」をキーワードにパパの育児、家事参加をしてきました。女性が子どもを生むことへの不安の解消にイクメンが注目されています。パパが育児に関わるとママの育児ストレスが軽減されたり、パートナーシップが強まります。パパが育児参加するほど出生率が上がり、また出産後もママが就労するほど出生率が上がります。仕事をしながらでも育児、社会貢献、地域貢献を笑顔で出来る父親を増やしていくことを目的にしています。育児に関わることを地域と関わることを大事にしていくと老後に生きてきます。地域のママ友70人、パパ友40人、ジジ友20人、ババ友30人もいて、3・11にお子さんを迎えに行ってくれたのはパパ友でした。まさに遠くの親よりも近くのパパ友です。今は少子化ではなくすでに少子で、社会のOSを変えていかなくてはいけないと思います。国が動くとメディアが動きマーケットも動きます。これをブームではなくムーブメントにしたい。スーパーイクメンになるには毎日やるんだという覚悟と自覚と責任、後は時間があればどんな男性でもなれます。育児は母親がやるものという女性のなかのOSも古い、共働き共育てがベターモデル。子どもが生まれると夫婦で大事なものが変わってきます。女性の愛情は子どもに注がれパパへの愛情は低迷していきます。低迷したままでは、回復するかは産後の大変な時期に協力してくれたかで変わります。専業主婦たちの悩みはイクメンパパが居てくれたら変わっていきます。パパがする家事で一番多いのがゴミ出しですが、多くはゴミ袋移動です。ママが集めたごみを移動するだけ、集めることからするのがゴミ出しです。などファザーリング・スクールでお話しています。

ワークライフシナジー、ワークライフ・ハーモニー、ワークライフ・インテグレーションが望ましいですね。笑っている父親に変われば、家庭が変わる、地域が変わる、企業が変わる、そして社会が変わります。

パネルディスカッション 仕事と子育て・介護の調和を考える

成澤廣修氏（文京区長）

安藤さんとパパ友の成澤氏は、自治体首長の中で初めて育児休暇らしきものを取った方です。子どもに精一杯の愛情を注ぎたい、母体へのサポートをしたいという『家族』を大事にしたい思いからです。このことは全国へ波及し今では2名の知事を含め8名の首長が育児宣言をし、男性職員の育休取得の後押しになりました。庁内の制度を作り、職員の育児休業について、上司から声かけをする取り組みを行っています。また、育児休業以外にも、出産支援休暇は7割、育児参加休暇6割強と、文京区では、男性の育児参加が徐々に進んでいます。そして、介護休暇取得者もうち半数は男性となっており、取得者は毎年続いています。男性・女性とも「それぞれが担えることを、それぞれが担っていくこと」、その意味において、育児と介護は連続性があります。ふみだせパパ！プロジェクトの父親支援講座、一日保育士体験、ふみだせパパ！DAYなど文京区の事例を色々とお話いただきました。



太田差恵子氏（介護・暮らしジャーナリスト、NPO 法人パオッコ理事長）



遠距離介護を支援するNPO法人パオッコにはいろいろな相談があります。介護は『家族が大事』ということが逆に作用する場合もあり、自分で抱え込んでしまう事も多々あります。介護休暇の場合は介護する体制をいかに整えるかが大事でそれに費やすことが多いです。親と価値観が違うし、親戚などに「あなた一人の肩にかかっている」と言われるのはプレッシャーでその狭間で悩みます。介護は長期戦です。一人で抱え込まないで自分を大切に、介護を受ける親を中心にチームを組むことが大事です。そして情報を集めること、サービスを知ることが大事になります。しかしまだまだ世の中では共通認識が無いのが現状です。万々歳の介護はありません。それぞれニーズが違うので話し合いで折り合いをつけて少しでも笑顔になれるようにしたいですね。

矢島洋子氏（三菱UFJリサーチ&コンサルティング）

民間のシンクタンク。調査研究をして、民間のコンサルティングをしている矢島氏からはWLBからの介護についてデータをもとにお話をいただきました。そもそも介護保険導入のときは主たる介護者は家に居ることをベースに考えられました。現在介護の状況は50代男性でも2割弱の人が介護していて、これから自分自身も介護にかかわると思っているが働きながら続けられないと思っている人が24%ぐらいいます。女性はこれ以上います。働きながら介護ができるようにするには家族や親族で役割分担、情報共有など、会社では柔軟な働き方の提供など、また地域では生活サポート、法制度等の情報提供や相談など、そして医療機関等の医療・介護の提供などが必要だとの話をいただきました。



コーディネーター：会場からの質問ですがこれからは介護する夫や息子が大切になると思いますが何がハードルになると思われますか？介護について男性からの質問がありますか？

パネラー：男性からの相談は年々増えています。女性は愚痴が言えるネットワークが出来ていますが男性はプライドが邪魔をすることが多いです。介護サービスを受けさせたり、病院に行くことを親にどのように説得するか、納得してもらうのか悩んでいる家庭が多いです。介護をサポートする人をどれだけ増やすのか、また、認知症の場合など進んでしまうので悩んでないで一日も早く支援につなげていくことが大事だと思います。

コーディネーター：孫が介護している事例がありますがこれは合理的！？と思います。

パネラー：問題だと思います。昔からのジェンダーの問題にもつながります。女性のほうが給料が低いから合理的？世代間の問題など重なって起きているがそれは一時的なものだと思う。それを脱却するためにも親の世代が働きながらも介護が出来るようにしなくてはいけないと思います。しかし所得の低いほうがやめるといふ家庭が多い。最後はお金よねと言われる自分の生活設定を考えて次は老後が待っているということを考えてほしい。

コーディネーター：なぜ24年もやってきて介護はこんな感じなのか？何がだめだったのか？

パネラー：介護の社会化というと隔世の感があります。最初は、一人ひとりのニーズに合わせるのではなく予算に合わせていました。それしか受けられませんでした。介護者のニーズに合わせて今は選べます。今は働いている人が多く、正社員として働いている40～50代のシングル女性も多いです。介護の施策で何が欠けているかは働く人の視点と介護サービスの充実の施策が分断されていることだと思います。それぞれが少しずつ工夫していけば全体として良くなると思います。

コーディネーター：少子高齢化は必然だし労働力が減っていく中で長時間労働が諸悪の根源だと思います。

パネラー：管理職層が忙しく、親が介護に陥ったときどうコミュニケーションしていったらいいかわからない。女性が働き続けられるようになったがキャリアを形成していくかがわからない。管理職のあり方が変わってWLBが取れるようにしていかなくてはいけないと思います。

コーディネーター：会場からの質問です。人との関わりが苦手です。お酒も飲めません。地域や社会で関わりを広げる秘訣は何でしょうか？

パネラー：難しいですがこのような人は多いと思います。介護に関して言えば自分が楽になるためには味方を増やしていかななくてはならない。それには最低限挨拶できる環境を整えるだけでも違うと思います。自分の好きなこと、自分の好きな場所に出て行って、友人を作るというのもひとつの方法だと思います。

コーディネーター：そうですね。孤独は人間を鍛えますが孤立はあまりろくなことになりません。孤立にならないように積極的に情報などを取りに行くのが大事。友達を作るのが大事ですね。何か起きたときにセーフティネットになると思います。怯えていると笑顔になれないし、笑顔の無い人には話しかけてもくれない。コミュニケーションも成立しない。OSを入れ替えて、あるいは社会のOSを変えるために弱いですが個人の一人ひとりが声を上げてきちんと政策を判断していくことが大事だと思います。

